「韓国ドラマブーム」と、重ねて思う

韓国旅行をしたある母親から、【不思議なことにこの７日間、町中で、障害のある方を全く(一人も)見かけませんでした。車椅子の方もです！かれらは一体どこにいるのでしょう。専門家に聞くと「障害＝恥」と親は思っていて、家から出さないから・・・との返事でした。】

最近は、日本でも「韓国ドラマブーム」。重ね合わせて、色々考えてみた。

ほんの少し前までは、韓国は元軍人の大統領の政治体制であったし、また、北朝鮮との緊張関係もあり、そうそう社会に自由にものがいえない雰囲気だったよう。やはり、民主的社会に成長していかないと、障害児問題は日の目をみないという、本質的には残念なことだが、こうした社会的要因があるような気がする。

「冬のソナタ」等メロドラマが流行る韓国の現状から、戦後の日本の「君の名は」ブームと重ね合わせてしまう。経済的、社会システム的に安定しつつあり、国民も精神的に余裕をもちつつある現れとして、緊張状態の対局として癒し系のメロドラマが流行るのでないかとも思える。

また、社会の裏面史の映画（例えば、「シルミド」等）も制作されてきている。こうした社会的裏面史、矛盾を映画で表現できる社会に、韓国も成熟しつつあるとも云える。映画は、その国のその時代の文化の総合芸術とか。

一方、韓国は儒教の国。日本以上に「家」、「祖先」、「年配者」を尊重する精神風土。孔子からの家系図が一般家庭にもある国柄。それだけに、韓国はまだ、障害のある方が出にくい、連れ出しにくい雰囲気（精神風土）が、一昔前（今もまだあるが……）の日本同様に、根強くあるのかもしれない。

では、なぜ日本で今「ヨン様」ブームなのか？物質的に豊かになっても精神的充足感がなく、ストレス社会故に癒しを求めているのかなあ……。

こうした意味からも、障害者問題を考え、取り組むということは、国家のあり方、社会のあり方、我々一人一人の生き方を問い続けることでもあると思う。それだけに、社会を構成する一人一人が、障害児のことを考えることは、単に障害児当人・家族の支援を考えることだけでなく、各自の互いの存在を認め合う民主的社会を作ることに通じていることに気づき、共に考えてもらいたいというのが、私の切なる願いである。

以上の内容を私なりのコメントとして纏めて、メル友の母親に返信した。

（2004 年 11 月 12 日　記）